

馬建忠のインド紀行(1881年)

——『南行記』——

〈要 約〉

坂 野 正 高

文法書『馬氏文通』の著者として、また李鴻章幕下の交渉家、行政官、^{ナポレオン}ないしはアントルプルヌールとして、あるいはまた、3年間のフランス留学の体験をふまえた辛辣な改革思想家として知られた馬建忠(1844—1900)は、『適可齋記言記行』と題する文集を公にしている。これは、経済政策・外交・海軍・鉄道などについて書いた意見書や論説のたぐい11篇と、視察・交渉ないしは政治工作のために派遣された折の旅行記5篇を取めている。

旅行記の中で、とりわけ注目に価するのは、本稿においてその紹介を試みる『南行記』である。これは、1881年に、馬建忠が李鴻章の非公式特使としてアヘン貿易の漸減案についてインド政庁の意向を打診し、かつ、アヘン事情(ことにアヘン収入の仕組)について調査するために、シムラまで往復3カ月の旅行をした折の日記体の記録である。この旅行記は、アヘン問題についての打診や調査という彼のいわば公的な活動を知るための資料として大切であるばかりでなく、上海、香港から始まって、サイゴン、シンガポール、ピナン、さらには、インドの各地など、行く先々でのさまざまな中国人や外国人との出会いや、その土地の事情についての見聞の記録としても貴重である。ことに、彼のインドについての観察は、1881年という時点で、ヨーロッパと中国の双方を知る中国の実務

インテリがインドに公務で旅行して、何を見たか、そして、何を考えたかを示すものである。

なお、馬建忠に同行した呉廣霈という外交官志望の青年が、『南行記』よりもさらにくわしい『南行日記』という旅行記を書いている。この二つの旅行記を併せ読むことによって、この旅行の種々相が一層明かになる。